彙報

倫理研究會

四月二十四日(金)午後五時半より學生集會所乾室にて例會をかれ和辻先生並びに新入生諸君の歡迎會を左記の如くに開催す。

家族制度について　中島法學博士

教育研究會例會

五月七日(木)六時半より學生集會所乾室にて

崇仁小學校の教育

に關し同校校長法學士伊藤茂光氏のお話しありたり。

新著紹介

神の念ひ　出隆著

氏が嘗つて雜誌「講座」其他に載せられた論文を集めたもの、神の念ひと惡とに關する思想を明晰に、且つ、興味深く物せられてあつて、敎へられる所が多い。

氏の本書に現はされた思想の根本をなすと思はれるのは、かのヨハネ傳序文の「彼は世にあり、世は彼によりて成りたるに、世は彼を知らざりき。」のロゴスの思想である。「ある」と云ひ「なる」と云ひ「なせ」と云ふ、この何人も疑はぬ日常常套の言葉の內に、カントは理性の本質の動きを見たが、氏はこの先驗的なる我が如何に神的なるもの、神そのものなるかをとかんとする。「我考ふ故に我あり」のデカルトの古き眞理を把へて、「我あり」の我をつゝむ「我考ふ」の我は既に超個人的なるものなる事を敎へ、『「ある」は「思はれてある」のである、思ふが故にあるのである。人々夫々に千々の「思ひ」がある。それらの千々の思ひを通じて一つの「思ひ」がある。それは色々の「ある」をも「思ひ」をも思ふ思ひそのもの(意識一般)である。』と云つて我々が直に、否我々の念ひが直に神の念ひなる事を力說してゐられる。日常平凡なる物皆が神の現はれなる事をとき、永遠と共に變ぜざる自然法が神のものなると共に、日々の精進を命ずる道德法が等しく神の反省なる事を讃へる氏が、汎神論的なる色彩を多分に帶びて、ヘラクレートスのロゴスの內に「神は、晝にして夜、冬にして夏、戰爭にして平和、飽滿にして飢餓である」事を喜び、「反對の合致」をとかれるのは當然であらう。

かゝる思想は惡の問題を論ずる所に最も明に現はれてくる。ミケランゼロのアダムの創造の圖の內に見られた啓示に基を得て

かゝれたと云ふ「悪魔を創造する神」の一章は本書の内最も興味あるものである。一切の主である神は、又悪の創造主でもあられればならない。無邪氣な七歳の女の子は論理の命ずるこの推論を何の狐疑する事なしに主張する、しかしこの命題を眼のあたり見る事は、惱多い成年にとつて再び幼年の無邪氣さに歸る事を必要とする。しかもその還歸は、悪に對する容赦なき反省の路であつた。（この間の道筋は直接に本書を繙かれん事を望む。）が要するに氏は悪を神の創造し給ふのを見られたのである。もし神が悪をつくり給ひしにあられば、如何にして我々は悪の自覺を有し得るか、絶對的な禁止の意識否定の意識はいづこより生ずるか、悪になやみしが故に、悪の吾人の如何ともすべからざる事を認めしが故に氏はかへつて悪を神の裏に見る事を得たのである。が神の裏なる悪は既に神に攝せられた悪である、救はれたる悪である。かくて氏のリヴァイヴルはなつたのである。我が悪を創らんと欲しても、我が悪たれと命じてもその爲に悪は産まれるのではない。我が神に於て、神を通じて悪を見る、神が我に於て我を通じて悪を見るのである。即ち神の反省に於て悪が成立するのである。

氏は同章に於て創世記を手引として神の絶對自由の働に於て物々自體から一切世界の成立する過程への僅かな暗示を與へんとしてゐられる。しかし本書は氏もことわつてゐられる如くもと〳〵純學術的なるものではないのであつて、こゝに論理の筋道を求むべきではない。たゞ深き氏の體驗より敎へらるべきである。まして「神そのものは何ものであるか。神は如何にして一切の創造するか、即ち如何にして形をとり肉になるか。これらは未だ私の力の及ばない問題である、恐らくは又、遂に永久に人間の解くべからざる課題かもしれぬ」と云てゐられる以上。

自分は最後に小さな要求を氏に致したい。それは悪の問題、一般に反價値の問題と密切な關係を有する自由意志の問題である。氏はその五篇の論文のいづこにも自由意志の問題を論じてゐられない。之れが氏の論文にどこか不足を思はしめる所以ではなからうか。自由意志の問題も決して單なる理論の問題ではないのだから。そして氏は又悪の問題その他を論ぜらるゝに當つて主として下から上への道、即ち我から神への路をとつてゐられ、從つて我も神性を帶ぶる事をとかれるだけで、上より下への路、即ち神より我への路はとられず、從つて神に於ける人間性の問題には餘り觸れてゐられない。氏自身も先の引用文の終りにそれは人間の解き得ぬものなるかも知れぬと云つてはゐられるが、これも我々に不足を思はせる所以ではなからうか。不可能とせば何故か、神が充分に自己を啓示し得ざるは何故か。何故に神は自己を悉く示し得ざるか、祕密を含むか、その祕密は單に理智にとつてのみのも

のか否か。他日の著書の内に示教を給はらん事は多くの人の望む所であらう。氏も單に、「自分はどうせ馬鹿なのですから」と云ふ多くの女の内にむしろ不謙遜を認めらるゝのであるから、單に不可知に甘んずる哲學者に高慢なる自己認識を認められる事であらう。大村書店四六版、二五八頁、一六〇錢。（妄言多謝、高坂正顯）

寄贈書籍雜誌

悲劇美（フォルゲルト）の美學　東京大村書店　文學士　金田廉譯

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、觀想、內外教育評論、學校教育、教育時論、願慧、信濃教育、東亞之光、教育學術會、支那學、東洋思想研究、都市教育、生理學研究、教育論叢、密教學報講座。